

## 看護学生の化粧の現状と認識

荻 あや子<sup>\*1</sup> 岡山 加奈<sup>\*2</sup> 岡野 彩香<sup>\*3</sup>

### Current Status and Perception of Makeup among Nursing Students

Ayako Ogi<sup>\*1</sup>, Kanna Okayama<sup>\*2</sup>, & Ayaka Okano<sup>\*3</sup>

#### 要旨

本研究は、看護学生の化粧の現状と認識を明らかにする目的で、105名を対象に、質問紙調査を実施した。普段は9割以上、実習では約8割の学生が化粧をしていた。化粧にかかる時間は普段13分、実習では約8分と普段の化粧に比べて短く、化粧品は5割以上の学生がファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリームを使用していた。実習は普段より化粧を薄くし、【実習に適した化粧】で【真面目な印象を与えたい】などと考えていた。化粧の印象では、ファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリームを使用する化粧モデルBの評価が最も高く、優しさ、明るさ、信頼感の3項目において、他の化粧より評価が有意に高かった( $p<.01$ )。学生は実習の化粧として化粧モデルBを最も好ましいと考えていることが示唆された。

キーワード：化粧、看護学生、臨地実習、認識、実態

#### Abstract

A questionnaire survey was conducted with 105 nursing students to identify current status and perception of makeup among them. Results indicate that more than 90% of the students usually wear makeup, while 80% wear makeup during clinical training. It usually takes them 13 minutes to put on makeup, while it takes them just 8 minutes during clinical training, and more than 50% of them use foundation, eyebrow, cheek and lipstick or lip cream. During clinical training the students wear lighter makeup than usual; They seem to be concerned about “giving a serious impression” by wearing “an appropriate amount of makeup during clinical training.” Makeup B, which consists of foundation, eyebrow makeup, blush, and lipstick or lip cream, is highly evaluated by the students in terms of impression. This type of makeup is evaluated significantly higher for its tenderness, cheerfulness, and feelings of trust as compared with lighter or heavier types of makeup ( $p<.01$ ). It is suggested that students prefer to wear makeup B as appropriate during clinical training.

Keywords : makeup, nursing students, clinical training, perception, current status

## I. 緒言

看護師の職能団体である日本看護協会は、看護者の倫理綱領（2003）を定め、「看護者は、社会の人々の信頼を得るように、個人としての品行を常に高く維持する」ことを明示している。看護への信頼は、専門的な知識や技術だけでなく、誠実さや礼節、品性、清潔さ、謙虚さなどの行動によるところが大きく、看護者の動作や表情など外観に現れるふるまいが問われている。一方、看護観や価値観、倫理観などが複雑で多様化することで、看護師や看護学生（以下学生）の化粧が華

美になる現状があることも否めない。

先行研究では、化粧は身だしなみの一部として捉えられている（松本, 2008）。臨地実習における学生の身だしなみに関する意識調査（野中・加納, 2011）では、学生は華美でなければ、化粧は顔色をよく見せるためマナーの一部であり、マスカラの使用は77%、アイライナーの使用は71%、つけまつ毛の使用は32.3%が賛成であると、化粧を肯定的に捉えている。また、廣瀬・奥村・秋山他（2001）は、看護師の身だしなみに関する

\*1：姫路大学看護学部・Himeji University, School of Nursing

\*2：大阪市立大学大学院看護学研究科・Osaka City University Graduate, School of Nursing

\*3：水島中央病院・Mizushima Central Hospital

13項目の調査を患者、看護師、学生、教員に実施し、化粧は21～30歳の若い看護師や患者、学生ほど化粧の程度は「本人の自由でよい」という割合が多いことを報告している。佐谷戸・久保田・山岸(2003)は、化粧は自由でよいが患者や看護師は各々6割が薄化粧や自然な化粧がよいという意見で、看護師は相手の印象を考えて化粧方法を学ぶ必要があると述べている。また、医療従事者の身だしなみに関する研究(佐藤・渡辺・苔口, 2010)では、医療従事者の清潔な身だしなみは、院内感染の予防のみならず医療機関を利用する患者などがもつ医療機関への印象を決定づける要因のひとつになると指摘している。したがって、看護師を含む医療従事者は、自分がよいと思う身だしなみを整えるだけでなく、他人からどう見られているかを意識した身だしなみを考える必要がある。看護師や学生は、患者と直接かわり看護ケアを施すため、身だしなみの一部である化粧に配慮する必要があるが、臨床現場や教育現場において明確な化粧の基準は示されていない。そこで多様化する価値観の中で、学生は普段の化粧や臨地実習(以下実習)における化粧をどのように捉えているのか、その現状と化粧に対する認識を明らかにする目的で調査を行った。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象

A大学看護学科に在籍し、臨地実習を経験し、同意の得られた2～4年次生の女子学生118名

### 2. 調査期間

201X年9月9日～29日

### 3. データ収集方法

4年次生は、それぞれの研究室に属する学生に集まる日程を確認し、研究室ごとに調査を実施した。学生には、その都度、文書と口頭で研究概要と倫理的配慮について説明し、自記式質問紙への協力を依頼した。2年次生と3年次生には、講義終了後、教室において文書と口頭で研究概要と倫理的配慮について説明し協力を求めた。質問紙は回収箱を用意し、その場で回収した。

調査内容は、基本情報として学年、大学で授業を受けるとき(以下普段)と実習のときの化粧について、化粧の有無と化粧品の種類、時間・場所と、化粧をしない学生はその理由について調査した。また、化粧に対する考えを自由記述で求めた。化粧のイメージ調査では、荻・玉谷・岡山(2014)の調査票の化粧モデルを使用した。化粧モデルとは化粧A(薄)から化粧E

(濃)の5段階で作成したものである。化粧モデルAはファンデーションとアイブロウのみで、化粧モデルBは化粧モデルAにチークと口紅を加え、化粧モデルCは化粧モデルBにアイラインとマスカラを薄く追加し、化粧モデルDは化粧モデルCにアイシャドウを加え、化粧モデルEは、化粧モデルDで使用したマスカラとアイシャドウを濃く追加したものである。このように化粧の濃さの異なる5つの写真を用いて、清潔感、優しさ、明るさ、信頼感、真面目さの5項目について、①全く感じない1点、②どちらかといえば感じない2点、③どちらかといえば感じる3点、④すごく感じる4点の4段階で評価した。

### 4. 分析方法

統計解析ソフトはエクセル統計を使用し、各項目で単純集計をした。化粧モデルAからEにおいて、5項目の評価を合計し、平均評価得点(以下評価得点)を算出した。次に、化粧モデル5群の項目別での評価得点と、学年別評価得点を算出した。一元配置分散分析を用い、全体としての群間で有意差( $p < .05$ )を検定したのち、多重比較検定にTukey法を使用し、有意水準5%未満として評価得点を比較した。その際、最も化粧が薄く素顔に近い化粧モデルAを基準として、化粧モデルB、C、D、Eとの群間の差に注目し検討した。自由記述では、学生の化粧に対する考え方が表出している文脈をコード化(<>)し、次に、意味内容が類似しているものをまとめてサブカテゴリ(『』)とし、さらに、内容が類似しているものをまとめてカテゴリ(【】)を作り、名前を付けた。

### 5. 倫理的配慮

岡山県立大学倫理委員会で承認後(受付番号403)に、調査を実施した。研究概要や調査は無記名で行い、個人が特定されないよう十分に配慮することや、調査への協力は自由意思によるもので、調査への参加を取りやめなくなった場合はいつでも参加をやめることができ、それによって不利益は生じないことを伝えた。また、成績評価には全く関係がないこと、データは厳重に保管し研究以外の目的で使わないこと、さらに、調査結果は論文にまとめ、研究発表後は直ちにデータを破棄すること、調査について疑問や質問があれば速やかに対応すること、調査票の提出をもって同意が得られたこととする旨を説明した。

## Ⅲ．結果

## 1. 普段の化粧と実習での化粧の現状

調査票は118部配付し、2年次生28部、3年次生40部、4年次生37部の合計105部を回収した（回収率89.0%、有効回答率100%）。

化粧をしていた学生は、実習では82名（78.1%）で、普段は99名（94.3%）であった。化粧をする場所は、実習では自宅、自分の部屋、洗面所、リビングで、普段は自宅、自分の部屋、出先のトイレ、車内であった。化粧時間については、実習は平均 $7.9 \pm 6.2$ 分、普段が平均 $13.3 \pm 6.8$ 分であった（表1）。化粧をしていない学生は、実習で23名（21.9%）、普段は6名（5.7%）であった。その理由は、実習は「時間がない」、「化粧をすると患者さんから悪い印象をもたれてしまう」、「化粧をしない方が、清潔感がある」、「実習生という立場である」、「清潔感が損なわれる」、「ににおいが気になる」、「化粧をする心の余裕がない」、「マスクに粉がつくのが嫌」であり、普段は「しない方が好き」、「面倒くさい」、「汗で落ちてしまう」、「方法がわからない」、「時間がない」であった。

表1 実習と普段の化粧の比較 N=105

項目	実習中の化粧	普段の化粧
化粧有	82名（78.1%）	99名（94.3%）
化粧無	23名（21.9%）	6名（5.7%）
場所	自宅、自分の部屋、洗面所、リビング	自宅、自分の部屋、出先のトイレ、車内
時間（分）	$7.9 \pm 6.2$	$13.3 \pm 6.8$

学生が使用した化粧品は、実習ではファンデーション70名（85.4%）、アイブロウ51名（62.2%）、チーク45名（54.9%）、口紅・リップクリーム42名（51.2%）で、以下アイシャドウ14名（17.1%）、マスカラ11名（13.4%）、アイライナー11名（13.4%）、カラーコンタクト2名（2.4%）、その他2名（2.4%）でコンシーラの使用であった。普段ではファンデーション93名（93.9%）、アイブロウ77名（77.8%）、チーク81名（81.8%）、口紅・リップクリーム76名（76.8%）、アイシャドウ74名（74.7%）、マスカラ64名（64.6%）、アイライナー64名（64.6%）、以下カラーコンタクト13名（13.1%）、睫毛エクステ5名（5.1%）、つけ睫毛3名（3.0%）、その他4名（4.0%）で、二重テープ、コンシーラ、フェイスパウダーを使用する学生もいた（表2）。

表2 実習と普段に学生が使用する化粧品

項目	実習の化粧 (N=82)	普段の化粧 (N=99)
ファンデーション	70名（85.4%）	93名（93.9%）
アイブロウ	51名（62.2%）	77名（77.8%）
チーク	45名（54.9%）	81名（81.8%）
口紅・リップクリーム	42名（51.2%）	76名（76.8%）
アイシャドウ	14名（17.1%）	74名（74.7%）
マスカラ	11名（13.4%）	64名（64.6%）
アイライナー	11名（13.4%）	64名（64.6%）
カラーコンタクト	2名（2.4%）	13名（13.1%）
睫毛エクステ	0名（0.0%）	5名（5.1%）
つけ睫毛	0名（0.0%）	3名（3.0%）
その他	2名（2.4%） コンシーラ	4名（4.0%） 二重テープ、 コンシーラ、 フェイスパウダー

普段の化粧と実習の化粧の濃さを調査した結果、実習の化粧を、普段より薄くした学生は81名（98.8%）で、濃くした学生は1名（1.2%）であった（表3）。

表3 実習中の化粧の程度 N=82

実習中の化粧の濃さ	学生数
普段より薄い	81名（98.8%）
普段より濃い	1名（1.2%）

実習の化粧を普段より薄くした理由について自由記述を分析した結果、8カテゴリと23サブカテゴリが抽出された。【実習に適した化粧】には、『実習生に派手な化粧はふさわしくない』、『濃い化粧は実習にふさわしくない』、『状況に合わせる』など5サブカテゴリが含まれた。【真面目な印象を与えたい】では、『学ぶ姿勢であることを現したい』、『学生らしい態度で臨む』が含まれ、【清潔感が必要である】には『清潔感がある』、『清潔感をなくさない』など3サブカテゴリが含まれた。【悪い印象を与えない】は、『濃い化粧は悪い印象を与える』、『悪い印象を与えたくない』など3サブカテゴリで、【不快な思いをさせない】は、『濃い化粧は不快感を与えてしまう』、『相手を不快にさせない』の2サブカテゴリが含まれた。【気に留めない】には『化粧をする時間がない』、『面倒くさい』、『ほとんどの人がしていない』、『マスクをするため気にならない』の4サブカテゴリが、【指導を受けない】は『目立たないように』、『注意されないように』、『実習のきまり』の3サブカテゴリが、【手洗いが増える】には、『不要な手洗いが増える』が含まれた（表4）。

表4 実習の化粧を普段の化粧より薄くした理由

カテゴリ	サブカテゴリ
実習に適した化粧	実習生に派手な化粧はふさわしくない
	濃い化粧は実習にふさわしくない
	状況に合わせる
	最低限の身だしなみ
	病院だから
真面目な印象を与えたい	学ぶ姿勢であることを現したい
	学生らしい態度で臨む
清潔感が必要である	清潔感がある
	清潔感をなくさない
	清潔感が失われる
悪い印象を与えない	濃い化粧は悪い印象を与える
	悪い印象を与えたくない
	頑張っていると感じてもらえない
不快な思いをさせない	濃い化粧は不快感を与えてしまう
	相手を不快にさせない
気に留めない	化粧をする時間がない
	面倒くさい
	ほとんどの人がしていない
	マスクをするため気にならない
指導を受けない	目立たないように
	注意されないように
	実習のきまり
手洗いが増える	不要な手洗いが増える

## 2. 学生の化粧に対する考え方の内容分析

化粧に対する考えの自由記述を分析した結果、7カテゴリと22サブカテゴリが抽出された。学生は化粧を【人と会う時のマナー】、【時間・場所・状況に合わせる】、【見映えをよくする】、【印象をよくする】、【気分をあげる】、【個人の自由】、【化粧をするのは当たり前】と捉えていた。【人と会う時のマナー】には、『身だしなみのひとつ』や『最低限の化粧は必要なこと』、『人と会う時のマナー』、『社会におけるマナー』の4サブカテゴリが含まれた。【時間・場所・状況に合わせる】は、『TPOをわきまえてする』や『実習では適した化粧にする』、『濃い化粧は人を不快にする』、『実習ではしない方がいい』の4サブカテゴリであった。【見映えをよくする】には、『自分の見た目をよくする』、『健康的に見せる』、『汚い部分を隠す』、『シミやそばかすを予防する』の4サブカテゴリが、【印象をよくする】には、『自分の印象をよくする』、『自分をきれいに见せる』、『化粧をしないと外に出たくない』の3サブカテゴリが含まれた。【気分をあげる】は、『自分に自信をもつことができる』、『楽しいもの』、『気分を変える』の3サブカテゴリが、【個人の自由】には

『個人の自由』と『面倒くさい』が、【化粧をするのは当たり前】には、『化粧をすることは当たり前』と『化粧をしなくてはならない義務感』の2サブカテゴリが含まれた(表5)。

表5 化粧に対する考え方の内容分析

カテゴリ	サブカテゴリ
人と会う時のマナー	身だしなみのひとつ
	最低限の化粧は必要なこと
	人と会う時のマナー
	社会におけるマナー
時間・場所・状況に合わせる	TPOをわきまえてする
	実習では適した化粧にする
	濃い化粧は人を不快にする
見栄えをよくする	実習ではしない方がいい
	自分の見た目をよくする
	健康的に見せる
	汚い部分を隠す
印象をよくする	シミやそばかすを予防する
	自分の印象をよくする
	化粧をしないと外に出たくない
	自分をきれいに见せる
気分をあげる	自分に自信をもつことができる
	楽しいもの
	気分を変える
個人の自由	個人の自由
	面倒くさい
化粧をするのは当たり前	化粧をすることは当たり前
	化粧をしなくてはならない義務感

## 3. 化粧モデルAからEの印象に対する評価

化粧モデルA(ファンデーション、アイブロウ)から化粧E(ファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリーム、アイライン、濃マスカラ、濃アイシャドウ)の5つの異なる化粧モデルに対して、清潔感、優しさ、明るさ、信頼感、真面目さの5項目の得点を合計し評価得点を算出した。結果、化粧モデルAは $15.9 \pm 3.0$ 点、化粧モデルBは $17.6 \pm 2.3$ 点、化粧モデルCは $14.3 \pm 3.0$ 点、化粧モデルDは $11.4 \pm 3.0$ 点、化粧モデルEは $8.5 \pm 2.7$ 点で、化粧モデルBの値が最も高かった。化粧モデルAを基準とし、他の4群と比較したところ、化粧モデルB、C、D、Eで有意差が認められた( $p < .01$ ) (図1)。

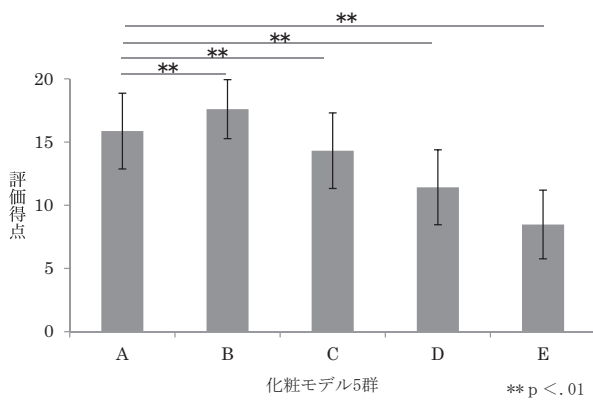


図1 化粧モデル5群の5項目総合評価得点の比較 N=105

次に、清潔感、優しさ、明るさ、信頼感、真面目さの5項目で得点に有意差があるかを検討した。化粧モデルBは、清潔感 $3.5 \pm 0.6$ 点、優しさ $3.5 \pm 0.6$ 点、明るさ $3.6 \pm 0.6$ 点、信頼感 $3.5 \pm 0.6$ 点の4項目で最も評価得点が高く、化粧モデルAは、真面目さの項目が $3.6 \pm 0.6$ 点と最も高かった。化粧モデルAを基準とし、他の4群と比較したところ、清潔感と真面目さについては、化粧モデルC, D, Eに有意差 ( $p < .01$ ) があったが、化粧モデルBには認められなかった。優しさは、化粧モデルB, D, Eに有意差 ( $p < .01$ ) が認められたが、化粧モデルCには認められなかった。明るさは、化粧モデルB ( $p < .01$ ) , C ( $p < .01$ ) , E ( $p < .05$ ) に有意差があったが、化粧モデルDには認められなかった。信頼感は、化粧モデルB, C, D, Eのすべてに有意差 ( $p < .01$ ) が認められた (表6)。

学年別に化粧モデル5群の5項目総合評価得点を比較すると、2年次生では、化粧モデルAは $16.3 \pm 3.8$

点、化粧モデルBは $17.7 \pm 2.5$ 点、化粧モデルCは $13.9 \pm 3.5$ 点、化粧モデルDは $10.8 \pm 3.2$ 点、化粧モデルEは $8.1 \pm 2.8$ 点で、化粧モデルBの値が最も高かった。化粧モデルAを基準とし、他の4群と比較したところ、化粧モデルC ( $p < .05$ ) , D ( $p < .01$ ) , E ( $p < .01$ ) に有意差が認められた。3年次生では、化粧モデルAは $15.6 \pm 2.8$ 点、化粧モデルBは $17.7 \pm 2.1$ 点、化粧モデルCは $14.7 \pm 2.8$ 点、化粧モデルDは $11.4 \pm 2.8$ 点、化粧モデルEは $8.5 \pm 2.4$ 点で、化粧モデルBの値が最も高かった。化粧モデルAを基準とし、他の4群と比較すると、化粧モデルB, D, Eに有意差が認められた ( $p < .01$ )。4年次生では、化粧モデルAは $15.8 \pm 2.6$ 点、化粧モデルBは $17.4 \pm 2.5$ 点、化粧モデルCは $14.2 \pm 2.8$ 点、化粧モデルDは $11.9 \pm 2.9$ 点、化粧モデルEは $8.8 \pm 3.0$ 点で、他の学年と同様に化粧モデルBの値が最も高かった。化粧モデルAを基準とし、他の4群と比較したところ、化粧モデルD, Eに有意差が認められた ( $p < .01$ ) (表7)。

さらに、化粧モデル5群の5項目総合評価得点において、各学年間で差があるかを比較検討した。学年が上がるにつれて、化粧モデルDとEで化粧の程度が濃いつきの評価得点が高くなる傾向にあったが、統計学的有意差は認められなかった。

#### Ⅳ. 考察

化粧をしている学生は、普段は9割以上で、実習では約8割と減少し、化粧時間においても普段は13分であったが、実習中は8分と短い時間で化粧をしていた。また、普段の化粧では、ファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリーム、アイシャドウ、

表6 化粧モデル5群の項目別評価得点の比較

N=105

	清潔感	優しさ	明るさ	信頼感	真面目さ
	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値
化粧A	$3.4 \pm 0.7$	$3.2 \pm 0.8$	$2.6 \pm 0.8$	$3.1 \pm 0.8$	$3.6 \pm 0.6$
化粧B	$3.5 \pm 0.6$ n.s	$3.5 \pm 0.6$ **	$3.6 \pm 0.6$ **	$3.5 \pm 0.6$ **	$3.4 \pm 0.6$ n.s
化粧C	$2.8 \pm 0.7$ **	$2.9 \pm 0.7$ n.s	$3.3 \pm 0.7$ **	$2.8 \pm 0.7$ **	$2.6 \pm 0.7$ **
化粧D	$2.2 \pm 0.7$ **	$2.3 \pm 0.7$ **	$2.7 \pm 0.8$ n.s	$2.1 \pm 0.7$ **	$2.0 \pm 0.6$ **
化粧E	$1.5 \pm 0.7$ **	$1.8 \pm 0.6$ **	$2.3 \pm 0.9$ *	$1.6 \pm 0.6$ **	$1.3 \pm 0.5$ **

一元配置分散分析, Tukey法による多重比較 \*;  $p < .05$  \*\*;  $p < .01$  n.s = not significant

表7 化粧モデル5群の学年別評価得点の比較

N=105

学年/群	化粧A	化粧B	化粧C	化粧D	化粧E
	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値	得点 ± SD p 値
2年次生 N=28	$16.3 \pm 3.8$	$17.7 \pm 2.5$ n.s	$13.9 \pm 3.5$ *	$10.8 \pm 3.2$ **	$8.1 \pm 2.8$ **
3年次生 N=40	$15.6 \pm 2.8$	$17.7 \pm 2.1$ **	$14.7 \pm 2.8$ n.s	$11.4 \pm 2.8$ **	$8.5 \pm 2.4$ **
4年次生 N=37	$15.8 \pm 2.6$	$17.4 \pm 2.5$ n.s	$14.2 \pm 2.8$ n.s	$11.9 \pm 2.9$ **	$8.8 \pm 3.0$ **

一元配置分散分析, Tukey法による多重比較 \*;  $p < .05$  \*\*;  $p < .01$  n.s = not significant

アイライナー、マスカラの7製品を6割以上の学生が使用していた。一方、実習では、ファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリームの4製品を5割以上の学生が使用していたことから、普段と実習では、化粧品の種類や使用方法を区別していることが窺える。状況や場面に応じたふさわしい化粧の仕方が存在し(飛田, 2001)、学生自身で使い分けていることが考えられる。また、普段と実習の化粧において、アイシャドウ、マスカラ、アイライナーの使用の有無に違いがあり、3製品の特徴から実習では目元を彩る化粧を制限していることがわかる。目や口を強調する化粧は、人間の顔の中でも最も表情を表す部位を強調したもので、自己表現を強調する化粧でもあり、意図的で人工的な感じを与えると述べている(石田, 1995)。つまり、学生は、実習という特殊な学習環境において、施設という場にふさわしい学習者としての化粧を学生なりに模索し、対応しているといえる。また、実習の化粧の濃さでは、普段より薄くした学生が8割以上いることや、その理由に【実習に適した化粧】として、『実習生に派手な化粧はふさわしくない』や『濃い化粧は実習にふさわしくない』、『状況に合わせる』などが含まれ、学生が派手な化粧や濃い化粧が実習にふさわしくないことを認識していることがわかる。また、実習生として【真面目な印象を与えたい】には、『学ぶ姿勢であることを現したい』や『学生らしい態度で臨む』が含まれ、実習に向き合う姿勢を他者に理解してもらいたいと外観に配慮していることが窺える。また【清潔感が必要である】には、『清潔感がある』や『清潔感をなくさない』などが含まれ、学生は薄い化粧により清潔感を重視していることがわかる。普段より化粧を濃くした学生や変わらないと回答した理由には「健康的な印象にする」があり、学生が、普段から健康的な印象を与えるような化粧を心がけていることがわかる。茂木(2009)は「自分自身で他者が好意をもつ社会的な自己の姿をつくりあげ、その顔を他者に開かれた窓として提供していくのに、化粧は重要な働きをしている」と述べており、他者の視線を意識し他者の視線に導かれながら化粧が施されていると推察される。つまり、学生は、実習で出会う患者や看護師とのかかわりを通して、実習にふさわしい自分自身の化粧を見出す手がかりを得ているともいえる。実習の場で出会うさまざまな人々に対して、清潔感があり、真面目な印象を与える実習に適した化粧をしたいと考えていることが明らかになった。

化粧に対する考え方では、学生は化粧を【人と会う時のマナー】や【時間・場所・状況に合わせる】、【見映えをよくする】、【印象をよくする】、【気分をあげる】、【個人の自由】、【化粧するのは当たり前】と

捉えている。【人と会う時のマナー】では、化粧を『身だしなみのひとつ』であるとし、『最低限の化粧は必要なこと』と整えておくべき作法であると考えている。【見映えをよくする】は、『自分の見た目をよくする』や『健康的に見せる』が、【印象をよくする】には『自分の印象をよくする』や『自分をきれいに見せる』などが含まれ、他者に与える印象を意識的に配慮していることが窺える。【気分をあげる】では、学生が『自分に自信をもつことができる』ことや『気分を変える』ための手段になっていることがわかる。【時間・場所・状況に合わせる】には、『TPOをわきまえてする』や『濃い化粧は人を不快にする』、『実習ではしない方がいい』が含まれている。これらは実習に関連した回答であり、学生は、実習で人とのかかわりを強く意識していることが窺える。【個人の自由】には、<化粧は必ずしも必要なものではなく、その人がしたいようにするのがよい>という個人の価値観をより尊重した考え方も見られる。学生は、化粧に対して肯定的な考えをもっており、見た目をより美しく自己の満足感のためにするだけでなく、他者に与える影響や個人の気分を変えるものとして捉えようとしていることが明らかになった。

化粧モデル5群の5項目総合評価得点(清潔感、優しさ、明るさ、信頼感、真面目さの5項目)では、化粧モデルBの評価が有意に高く、学生から最も支持を得られた化粧であることがわかる。また、化粧モデルBの次に化粧モデルAの評価得点が高く、化粧モデルAとC、化粧モデルAとD、化粧モデルAとEの比較において有意差が認められたことから、化粧モデルC、D、Eは学生からの評価が低い化粧として位置付けられる。清潔感、優しさ、明るさ、信頼感、真面目さの5項目について化粧モデル5群で比較した結果は、化粧モデルBが清潔感、優しさ、明るさ、信頼感の項目で最も評価得点が高い。また、化粧モデルAには有意差はないが、化粧モデルBより真面目さの評価得点が高いことから化粧モデルAは、真面目さや清潔感を評価していることがわかる。つまり、化粧モデルAはファンデーションとアイブロウのみで、化粧モデルBは化粧モデルAにチークと口紅・リップクリームを加えたものであるため、化粧モデルAは、より素顔に近い自然な化粧法で清潔感や真面目さを表現しているといえる。これは、実習では普段より化粧を薄くした学生が9割近くいることや、その理由に【真面目な印象を与えたい】や【清潔感が必要である】というカテゴリが挙がっていることとも関連し、学生の化粧に対する価値観では、薄い自然な化粧が真面目さや清潔感をもたらす他者から評価されることを理解していると推察される。化粧モデルCは、化粧モデルBにアイライン、マスカラなどの

アイメイクを加えたものである。また、化粧モデルDは、化粧モデルCにアイシャドウを加え、化粧モデルEは化粧モデルDよりマスカラとアイシャドウを濃くしたものである。2～4年次の各学年において、目を強調した化粧モデルD、Eの評価が有意に低くなっており、派手な濃い化粧が【実習に適した化粧】でないことを、学生自身が評価していることも明らかになった。また、化粧に対する考えに【人と会う時のマナー】や【時間・場所・状況に合わせる】、【印象をよくする】などがあり、他者に与える影響や他者からの評価を意識している内容であることがわかる。実習において目を強調した化粧は、学生の評価が低く、好ましくない化粧であることが示唆された。

## V. 結論

1. 実習で化粧をしていた学生は約8割、普段は9割以上であり、実習中の化粧時間は約8分で、普段は約13分であった。
2. 実習の化粧は、約5割以上の学生がファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリームを使用していた。普段の化粧は、約6割以上の学生がファンデーション、アイブロウ、チーク、口紅・リップクリームに加えて、アイシャドウ、マスカラ、アイライナーを使用していた。
3. 実習の化粧は、ほとんどの学生が普段より薄く、薄くした理由は【実習に適した化粧】、【真面目な印象を与えたい】、【清潔感が必要である】、【悪い印象を与えない】、【不快な思いをさせない】、【指導を受けない】、【気に留めない】、【手洗いが増える】であった。
4. 学生の化粧に対する認識は【人と会う時のマナー】、【時間・場所・状況に合わせる】、【見映えをよくする】、【印象をよくする】、【気分をあげる】、【個人の自由】、【化粧するのは当たり前】の7カテゴリが抽出された。
5. 化粧モデルAからEでは、化粧モデルBの評価が最も高かった。また、優しさ、明るさ、信頼感の3項目において、他の化粧より評価が有意に高く( $p<.01$ )、学生は実習の化粧として最も好ましいと考えていることが示唆された。

## 謝辞

本調査の実施にあたり、ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

本研究の一部は、第35回日本看護科学学会学術集会

(広島市) 2015において報告した。

本研究において、申告すべきCOI状態はない。

## 引用文献

- 廣瀬規代美, 奥村亮子, 秋山恵, 内田真理子, 斎藤悦子, 佐俣愛里, 樋口郭子, 武藤麻衣子, 森本知子, 林陸郎 (2001): 看護婦の身だしなみに関する研究, 看護管理11 (6), 445-451.
- 石田かおり (1995): 現象学的化粧論 おしゃれの哲学. 理想社. 25.
- 松本じゅん子 (2008): 入院患者の化粧行動に対する看護師の認識, 日本教育心理学会総会発表論文集 (50), 55.
- 茂木健一郎 (2009): 化粧をする脳, 集英社新書, 58.
- 日本看護協会 (2003): 看護者の倫理綱領, 1-6. [https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code\\_of\\_ethics.pdf](https://www.nurse.or.jp/home/publication/pdf/rinri/code_of_ethics.pdf) (参照 2019年9月30日)
- 野中浩幸, 加納みなみ (2011): 臨地実習における看護学生の身だしなみに関する意識調査, 医学と生物学, 155 (6), 346-350.
- 荻あや子, 玉谷奈都美, 岡山加奈 (2014): 大学生が患者の視点で捉えた看護師の化粧に対する評価, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 21 (1), 131-139.
- 佐谷戸優子, 久保田香, 山岸晃子 (2003): 身だしなみに関する研究 - 看護師と患者の意識の違いについて -, 長野赤十字病院医誌16, 113-116.
- 佐藤法仁, 渡辺朱里, 苔口進 (2010): 医療従事者の身だしなみに関する研究, 日本医事新報, 4498, 95-98.
- 飛田操 (2001): 化粧のもたらす対人魅力, 高木修監修, 化粧行動の社会心理学所収 (114-122). 北大路書房.